

## 今月の INDEX

## 01 プロジェクト便り

「第三国研修中南米の有用天然植物資源の開発と持続的利用」

山本フアン・カルロス 次長

## 02 ボランティア便り

「南米から被災地を応援」

仲野麻未 日系社会青年ボランティア

## 03 日系社会便り

「2011年継承日本語教育教師本邦研修に参加して」

米美子 帰国研修員

## 04 アルゼンチン文化 コーナー

「マテ茶」

山本フアン・カルロス 次長

## 05 最近の動向

JICA日程

## ✚ 01 プロジェクト便り

## 第三国研修「中南米の有用天然植物資源の開発と持続的利用」

山本フアン・カルロス 次長

3月12日～23日、国立農牧技術院（INTA）の花弁研究所にて、花卉・観賞植物新品種の開発を目指した、天然植物の遺伝資源の開発と持続的利用に関係する域内人材の技術レベル向上を目的とする、第三国研修「中南米の有用天然植物資源の開発と持続的利用」の第一回のコースが実施されました。

植物遺伝資源の検索と収集、育種技術に関する座学と実習を組み合わせた同コースには、エクアドルから4名、ブラジル、チリから各2名、コスタリカ、ペルーから各1名、外国から計10名、国内から2名参加しました。

本コースでは、中南米地域に多く存在し、花卉・観賞植物として商業化の可能性が高い貴重な植物資源の保全と持続的利用を促進するため、遺伝資源探索・収集、遺伝資源の特徴分析・利用・保全、遺伝資源の伝播及び栽培化等について、域内関係機関の人材レベル・アップを目指しています。

中南米地域には、天然植物資源に富んだ国が多く存在しますが、十分に活用されていないのが実情であり、他方、欧州を中心とする世界の大手種苗会社は、過去30年に亘って戦略的に商業化の可能性が高い品種を探索・育種し、品種登録を行っ



てきており、原産国の遺伝資源を利用して開発された新品種が市場に多く流通しています。

上述の花弁研究所は、移住事業の一環として設置した JICA「園芸総合試験場」において実施した、技術協力プロジェクト「園芸開発計画（1999～2004）」の終了と同時に、試験場の移管を受けた INTA が設立した研究所です。

このプロジェクトを通じて、花卉遺伝資源の素材化、及び保存分野における技術者が養成されるとともに、アルゼンチンの気候・風土にあった花卉育種理論に基づく効率的育種技術が確立され、実用的な花卉品種の育成技術が開発できるようになりました。

2004年のプロジェクト終了後は、予算や人員面を充実し、研究所の活動が継続されてきたことから、十分な経験・ノウハウが蓄積され、域内諸国の技術者を受け入れての第三国研修が実施できるレベルに達しました。

現在では、この花卉研究所が拠点となり、花卉・観賞植物の収集や評価を行う、INTA 地域試験場の全国ネットワークが構築されています。また、花卉研究所を中心となり、アルゼンチン花卉園芸学会が設置されており、南米花卉園芸学会にも積極的に参加しています。本分野における域内唯一の研究機関として、知名度を上げており、コスタリカ、ブラジル、ドイツからの研修員を受け入れているほか、ロマス・デ・サモラス大学との提携を通じ、花卉園芸に関するマスターコースの運営、本分野におけるマスター、ドクター学生に対し、研究の場を提供しています。

政府のイニシアチブによって、2009年に設立され、花卉産業に関係する全てのアクター（生産者組合、研究機関、大学、自治体、花店協会、花市場、資材業者等）が参加し、花卉産業の発展に関する協議・政策提言を行う場となっている「花卉産業フォーラム」に研究機関を代表して積極的に参加しています。

これまで、9品種の登録が完了しており、本邦種苗会社「サカタのタネ」と共同開発し、日本で登録したゴマノハグサ科の「メカルドニア'イエロークロサイト'（Mecardonia 'Yellow Chrosite）」も、その一つです。

今回の第三国研修には、「園芸開発計画プロジェクト」の初期専門家として派遣された、千葉大学環境健康フィールド科学センターの國分准教授が、在外講師として来アしました。また、今回実施したコースにおいて中心的な役割を果たした、当時のカウンターパート2名について、「移転した技術を全て吸収し、博士号も取得した後、それ以上のレベルに達していることは非常に嬉しい」とのコメントを残しました。



## 02 ボランティア便り

### 南米から被災地を応援

仲野麻未 日系社会青年ボランティア

¡Fuerza Japón! がんばれ日本!

この言葉を何度耳にしたことだろう。昨年3月11日の東日本大震災の様子は、ここ南米アルゼンチンでもオンタイムで毎日報道されていた。日系社会ボランティアの私にも毎日買い物するスーパーや、たまたまバス停で出くわした人でさえ、「あなたの家族は大丈夫？」と心配そうに声をかけてくれた。また沢

山の日系団体が被災地を支援するためのバザーやイベントを行った。私の巡回先の日系日本語学校でも子供達が被災地に応援の声を届けようと絵手紙を作成した。

今年の1月23日から2週間、在アルゼンチン日本大使館広報文化センターで、「TEGAMI 展～日本の被災地から届いた手紙～」と題して企画展を行った。これは、アルゼンチンの日系日本語学校の生徒が描いた、日本への応援絵手紙と日本の芸術家達70名が、被災地の様子を表現した作品の共同展である。この



作品展で震災1周年を前にして、日本の被災地の様子を伝え、日本文化を体験してもらうことで、震災の際援助してくれた日系社会やアルゼンチンの人々に感謝の気持ちを伝えたかった。TEGAMI 展はアルゼンチン全土の日系社会ボランティアが協力し、約350人が訪れ、約50人が絵手紙を体験した。また、子供向けの日本文化体験講座を行い、約200名の子供たちが、折り紙、盆踊り、節分の豆まきなどを体験した。子供の講座に参加したリアン君（7歳）は、“日本の文化は世界で一番バラエティーがあり、素晴らしい文化だと思う”と感想を述べた。

今回の作品展、文化講座を通して現地での日本への理解関心が深まり、また子供達からの日本への温かい応援メッセージが寄せられたことをとても嬉しく思う。

南米からの温かい応援メッセージが東北の被災地の皆さんにも届きますように。

### 03 日系社会便り

#### 2011年継承日本語教育教師本邦研修に参加して

米美子 日本語教師  
ブエノスアイレス日亜学院

3度目の正直といいますが、3回目の応募で長年の夢であった本邦研修に合格ができました。図らずも自分が一番受講したかった日本語専門コースであり、次の2つの目標をもって参加しました。

1. 中級以上の教授法を学び、どんなレベルのクラスも教えられる技術を身につけること。
2. 話せる、使える日本語を教えられる教室活動を学び、楽しくて身につく日本語クラスをつくる技術を学ぶこと。

2011年度、上記専門コースへの参加者はブラジル人2名、メキシコ人1名、そしてアルゼンチンから1名、計4名で、ブラジルの1名を除いた3名がまだ中級以上を教えたことがない先生方でしたので、初級後半の教授法復習から始めて、初中級、中級の教授法を「中級へ行こう」「中級を学ぼう」を使って学び、最後は他のコースの先生方を生徒に仕立て、各自が30分の受け持ちで実習を行いました。



その他、基礎的なコンピューター操作の学習、完璧なプレゼンテーションの手法、評価法概論、継承日本語教育の一環としての移民史を、教室活動にどのように取り入れていくか等を学びました。

また、日本在住外国人に日本語を教える教師養成の現場見学、横浜市の田浦小学校、横浜市立大学生との交流、愛知県豊田市の在住日系人への支援活動のひとつである日本語教室の見学などもプログラムに入れていただきました。

そして、新しい教育方法として、チュートリアル（自律）学習について説明していただき、日本語学習者の多彩な必要に応えるひとつの解決策として、自校にあった形でとりいれる方法も探しました。



コンピューター室の窓から見える、横浜みなとみらいの遊園地の巨大な時計や、華やかなネオンをにらみながら、夜中まで教案などの宿題をやったこと。時限の 23 時を過ぎて、警備の人に追い出され、消灯された廊下を手探りで自室に戻ったことも何回もありました。実習の前日は明け方まで自室の鏡の前で練習したこと。みんな楽しい、学生時代に帰ったような懐かしい思い出です。

実習や宿題が終わった日はストレス解消と称し、研修仲間とおいしいものを食べに出かけ、買い物にでかけたりする楽しみもありました。

横浜にしては大雪が降った夜はユキダルマ作りや雪合戦をした研修生もいました。横浜女子マラソンの日は、研修センターのすぐ横がマラソンコースになっていましたので、宿題の手を休めて大声で応援しました。

研修センターの設備で一番印象に残ったのはなんといっても清潔で快適なトイレです。用をたすときの音を消すボタンを見たときはこんなところまで気を使うのか、とびっくりしました。

研修のあいま、お昼に食べに出かけた中華料理や日本そばの味も最高でした。

1 日 24 時間が足りないほど充実した研修を受けて、出した結論はまだまだこれからが勉強ということです。幸いに、今年から研修の成果を活かし、さらに自己研修を続けるべく、初中級以上のクラスを担当させていただくことになりました。まだまだこれからです。

## 04 アルゼンチン文化コーナー

### マテ茶

山本ファン・カルロス 次長

マテ茶 (Mate) は、南米のパラナ川、パラグアイ川とウルグアイ川上流の流域とブラジル南部原産とするジェルバ・マテ (*Ílex paraguayensis*) の葉や小枝を乾燥させた茶葉に、水または湯を注ぎ成分を浸出した飲料です。日本では、ビタミンやミネラル、ポリフェノール類の一つであるフラボノイドなどを多く含んでいることから（「飲むサラダ」とも言われている）健康飲料として知られています。南米では、アメリカ大陸発見以前から、先住民（主にグアラニー族）より消費されており、進出してきたスペイン人よりただちに愛用された飲料です。

伝統的な飲み方は、茶器に容量の 3/4 程度の茶葉を直接入れ、水または摂氏 70~80 度程度のお湯を注ぎ、ここに先端に茶漉しがついたポンビージャと称する専用のストローを差し込み、抽出液を飲む方式です。また、家族や仲間でおしゃべりをしながら、回し飲みするのが特徴です。容器としては、ヒョウタン製や木製のものが最も多く使用されていますが、金属製、ガラスや磁器製のものも見られます。

近年では、ティーポットで淹れて抽出液のみをカップに注いで飲む場合もあり、また、ティーバッグも普及しています。

アルゼンチン、パラグアイ、ウルグアイでは、全国的に消費されていますが、ボリビア、ブラジル、チリの一部でも消費されています。

また、アルゼンチンは、域内で生産されるジェルバ・マテの総生産量の約60%を占めており、栽培面積は、北東部地域のコリエンテス州とミシオネス州における約20万haに上り、約二万户の農家がジェルバ・マテを生産しております。約260の乾燥工場、約140の粉碎工場が存在しますが、約20社が総生産の70%を占めております。

アルゼンチンにおける、マテ茶の年間総生産量は、約2.5億キログラムであり、主要輸出先であるシリアを始め、約15%が輸出されています。

マテ茶の茶葉は、ジェルバ・マテなどの葉や小枝を摘みとって採集し、すぐに火入れを行い、葉に含まれている酸化酵素を不活性化させ、熱風で乾燥（収穫して24時間以内に乾燥することが重要）、その後適度な大きさに破碎して製造され、1年間ほど熟成させた後に茶葉として出荷されるものです。

アルゼンチンにおけるジェルバ・マテの1人当たり年間消費量（2005年）は、6.4kg（約100リットル相当）であり、コーヒー（0.9kg）、紅茶（0.16kg）の消費量を大幅に上回っています。最近では、若者に人気が高く、マテ茶を最も購入する年齢層は、12～19歳（19.70%）と25～34歳（19.50%）の層です。女性の消費者が男性よりも多く（女性：89.5%、男性：88.20%）であり、また、全国の消費量の約56%は、低所得層により占めております。

マテ茶の1人当たり年間消費量については、アルゼンチンは世界で2位であり、最も消費量が多い国は、ジェルバ・マテの生産国でないウルグアイとなっていて、一人あたりの年間消費量は、9.4kg（2009年）とされています。ウルグアイでは、10人のうち8人がマテ茶を飲むと言われますが、確かに、ウルグアイでは、片手にマテ（容器）を持ち、もう片手にポットを持って飲んでいる人たちを、路上やバスの中などで多く見かけられます。

最近、日本の研究者とアルゼンチンの研究者間（JICAの帰国研修員も加わっています）で、ジェルバ・マテから、創薬原料として価値の高い物質を抽出するための共同研究が始まっており、これが成功すれば、ジェルバ・マテ産地に新しい産業と雇用を創出することとなり、地域の活性化に結びつくことが期待されています。



## 05 最近の動向

3月3～8日： 第三国研修「中小企業における経営・生産管理技術の応用」・平本在外講師（北海道大学経済学部教授）来ア

3月9～19日： 科学技術研究員派遣「ALOS 高解像度衛星画像を用いたアルゼンチン・アンデス山岳地帯における氷河台帳作成」・浮田教授（新潟大学）、奈良間研究員（総合地球環境学研究所）来ア

3月11～18日： 第三国研修「第三国研修「中南米の有用天然植物資源の開発と持続的利用」・國分在外講師（千葉大学環境健康フィールド科学センター）来ア

3月12～23日：第三国研修「中南米の有用天然植物資源の開発と持続的利用」の実施

3月26日：シニア海外ボランティア6名離任

3月28日：シニア海外ボランティア4名着任

---

## 平成24年3月－111号

---

過去のメールマガジンは下記のサイトをご覧ください。

<http://www.jica.go.jp/argentine/office/others/magazine/index.html>

西語版のメールマガジンは下記のサイトをご覧ください。

[http://www.jica.org.ar/sitio-nuevo-syswarp/index.php?option=com\\_content&view=section&layout=blog&id=15&Itemid=64](http://www.jica.org.ar/sitio-nuevo-syswarp/index.php?option=com_content&view=section&layout=blog&id=15&Itemid=64)

---

JICA アルゼンチン駐在員事務所では、皆様のご意見、ご要望、記事の投稿をお待ちしております。以下のアドレスにお送りください。

[ag\\_oso\\_rep@jica.go.jp](mailto:ag_oso_rep@jica.go.jp)

登録内容の変更、配信停止についても、同アドレスにお願いいたします。

---

国際協力機構(JICA) アルゼンチン駐在員事務所

Av. Maipú 1300, Piso 21

(C1006ACT) Ciudad Autónoma de Buenos Aires, Argentina

<http://www.jica.go.jp>

Tel 54-11-4313-8901

Fax 54-11-4313-5778

---